

発達遅滞児における応答誘発表現から情報要求表現への機能移行に関する検討

○和 史朗

藤原義博

寺尾恵美子

(北海道札幌養護学校) (上越教育大学) (上越教育大学大学院)

1. 問題と目的

発達遅滞児や自閉症児は情報要求行動の獲得に困難を示すことが指摘されている(e.g. Taylor & Harris, 1995)。そこで、発達遅滞児に情報要求行動を形成するための研究が試みられるようになってきており、その成果が報告されている(山本, 1987)。しかし、一方では獲得された行動が、訓練場面以外の日常場面においては広がり乏しいという般化困難の問題も同時に指摘されてきている。これは、先行研究においては、訓練者からの質問に対する答えが被験児に未学習の場合について情報要求行動を形成することが多く、このことが訓練者からの先行的働きかけといった刺激統制を生み出し、獲得された行動の日常場面での拡大を阻害する要因のひとつとなってきたものと考えられる。

一方、藤原・佐野(1989)は、自閉症児に対し、汎用的に聞き手の応答を引き出す自発的言語反応である応答誘発表現を形成し、この応答誘発表現が未知の物に対する質問としての機能を獲得したことを報告した。このことから、藤原・佐野(1989)の応答誘発表現の形成プログラムの中から直接、情報要求表現の形成につながるプロセスを抽出し適用することで、訓練者からの先行的な刺激提示に統制されない自発的な情報要求表現が形成できると予測した。本研究は、この訓練条件のもとで形成された応答誘発表現が、既知刺激に対する命名反応との間で分化して生起し、正応答反応を学習する機能を持った情報要求表現へと機能移行するかどうか検討することを目的とする。

2. 方法

(1)対象児：訓練開始時6歳10カ月の小学校特殊学級在籍の女児。身の回りの物品の命名ができ、1語文での要求が可能であった。

(2)標的行動：以下の①②の同時使用を標的行動とした。

①動作性応答誘発表現：指さしまたは手さしで刺激を特定化して聞き手の応答を誘発すること。

②言語性情報要求表現：音声言語反応「ナニ」を用い、聞き手に情報要求すること。

(3)実験場所及び期間

J大学附属障害児教育実践センター内の個別指導室で平成7年6月から平成8年3月まで実施した。1回10分程度のセッションを週2～6回実施した。

(4)実験刺激配置

藤原・佐野(1989)の訓練プログラムの中の、中の見えない箱やめくると裏に絵が描かれた白紙のカードを用いた「見えない」事態を省略し、情報があるにも拘らず知識未獲得のために「読めない／分からない」事態に変更することで、新しい情報を獲得するための情報要求表現形成の必然性を高めた。

(5)実験刺激

事前テストにより既知刺激と未知刺激に分けた絵カード、かな文字カード、漢字カード、ローマ字カードを用いた。訓練条件では3～5個の刺激を1組にして机上に置き、1セッションにつき30個の実験刺激について対象児の反応を調べた。

(6)手続き

セッションは、実験者と対象児が机を挟んで対座し、机上に実験刺激を横1列に並べたところから開始した。対象児の応答誘発表現または情報要求表現に対して実験者は即座に命名を行いながら、実験刺激を提示した。各実験条件と手続きは以下の通りである。

①第Ⅰベースライン条件：10粒ずつの菓子が入った透明な3個の箱に対する被験児の動作性応答誘発表現の生起を調べた。

②第Ⅰ集中訓練：菓子の入った透明の箱を机上に並べ、菓子に対する自己充足行動が生起する前の対象児の要求行動を実験者が即座に捉え、要求充足する。この対応を繰り返すことで聞き手の機能を確立し、訓練刺激に対する対象児の手さし反応を形成する。手さし反応が安定したら、訓練刺激を不透明の箱に移行した。この箱には、中に入った物の名前を対象児が読めない文字で書いたラベルを貼った。

③第Ⅱベースライン条件：動作性応答誘発表現の維持と、未訓練反応である言語性応答誘発表現「ナニ」の生起を調べた。実験刺激は、既知の物が入った箱に未知の文字ラベルを貼ったものを用いた。

④第Ⅱ集中訓練：動作性応答誘発表現に加えて、言語反応「ナニ」をプロンプト・フェイディング手続きと時間遅延法を組み合わせ形成した。訓練刺激は、既知の物が入った箱に未知の文字ラベルを貼ったものを使用した。「ナニ」反応が安定したら、訓練刺激に、めくると既知の物が描かれた未知の文字カードを混ぜ、

最後に既知刺激と未知刺激からなるカードを並べた事態へと移行した。

⑤**プローブ条件**：集中訓練で使用しなかった非訓練刺激に対する反応と、非訓練者に対する反応を調べた。

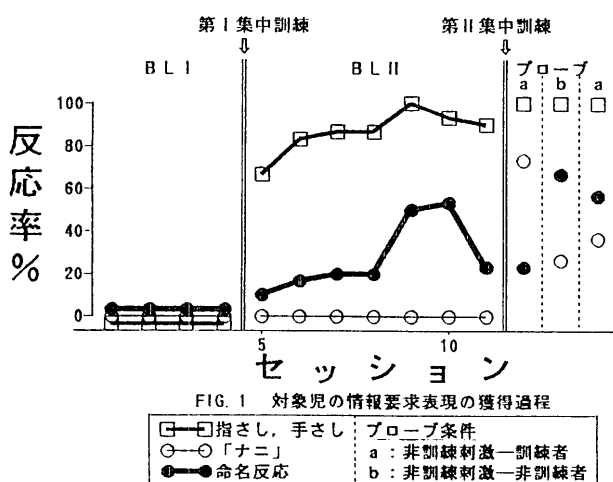
⑥**維持テスト**：プローブ条件終了の約1カ月後に、形成された情報要求行動が維持されているかを調べた。さらに、訓練条件で形成された情報要求表現が新しい情報を獲得する機能を有しているか査定した。未知や既知のカードを5枚1組で並べた条件で実施した。

⑦**場面般化テスト**：形成された情報要求表現が、聞き手からの質問に対する応答を要求された場面においても生起するかどうか調べた。実験者が未訓練のカード刺激を1枚ずつ対象児の眼前に提示して「これは何ですか」との質問を1セッションに30試行実施した。

3. 結果

第Iベースライン条件では、菓子の蓋を自分で開けようとする自己充足行動のみが生起し、動作性応答誘発表現は観察されなかった。第I集中訓練では、即時対応手続きにより自己充足行動から聞き手に向けた手さし行動へと反応型が移行し、未知刺激であった物への命名反応も生起するようになった。第IIベースライン条件では、動作性応答誘発表現の維持が見られたが、言語反応「ナニ」は生起しなかった。第II集中訓練により、未知刺激の割合を増し言語性応答誘発表現を確立した。既知刺激も含めたセッションでは、既知刺激に対する命名反応と情報要求表現「ナニ」との間で反応選択が生じた。プローブでは、非訓練刺激に対する情報要求表現と命名反応の反応選択が見られ、非訓練者条件でも同様の般化が見られた(FIG.1)。プローブ条件を通しての対象児の既知刺激に対する反応は、命名反応が82%、情報要求表現が18%であった。

維持テストでは、既知刺激に対する命名反応は生じたものの、言語反応「ナニ」の生起には言語プロンプトを要した。しかし、次のセッションからは、言語



反応「ナニ」が、プロンプトなしで生起するようになり、命名反応との間で反応選択が生じた。さらに、セッションを追って命名反応の生起率が上昇した。場面般化テストでは、プロンプトなしで情報要求表現が生じ、命名反応がセッションを追って上昇した。

4. 考察

本実験で行った手続きは、子どもの自発行動に大人が応答で追従するもので、従来行われてきた分化強化などの技法は用いなかった。それにも拘らず、対象児に情報要求表現と命名反応の間で反応選択が生じ、形成された情報要求表現を用いて未知刺激であった物の名称を学習した。この結果は、分化強化などの技法を用いなくても、子どもからの自発的な応答誘発表現に積極的に応答を随伴させることで応答誘発表現から情報要求表現への機能移行が可能であることを示すものであり、藤原・佐野(1989)の実験結果を支持した。

また、母親から、日常場面での自発的な情報要求表現の般化のエピソードが報告されたことから、大人からの先行的な働きかけを極力避けて子どもの自発的行動に聞き手側が応じる応答誘発表現の形成プログラムそのものに、日常での般化につながる要素が含まれていることが考えられる。

重度の発達遅滞児に対しては、教示要求表現のように機能的に分化した表現を形成する以前に、まず汎用的に人からの応答を誘発する応答誘発表現を形成することが妥当であり、応答誘発機能獲得後に情報要求表現への移行を図った本プログラムは、自ら他者に関わることの少ない重度発達遅滞児や自閉症児に対しても有効であると考えられる。

5. 引用文献

- 藤原義博・佐野とも子(1989) 自閉症児の応答誘発表現の形成. 日本特殊教育学会第27回大会発表論文集, 432-435.
 Taylor, A. and Harris, I. (1995) Teaching Children with Autism to seek information: Acquisition of novel information and generalization of responding. *Journal of Applied Behaviour Analysis* 28, 3-14.
 山本淳一(1987) 自閉児における教示要求表現の形成. 教育心理学研究, 35, 97-106.

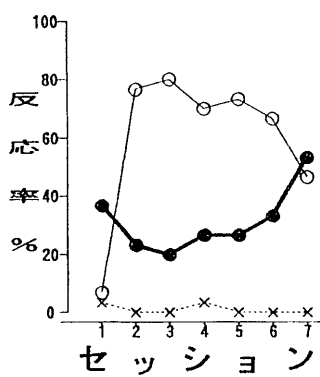


FIG. 2 維持テストにおける反応率

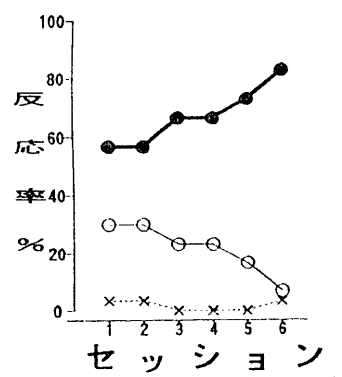


FIG. 3 場面般化テストにおける反応率